

ホトトギス

昭和十四年三月二十日出版
明治三十二年三月二十日創刊
昭和十九年一月一日発行
第一号

ホトトギス

一月号



俳句随想 〔二百九十五〕

汀子

「若葉して」は学者の間でも「若葉する」という動詞の連用形と考える立場と、「して」を手段をあらわす助詞と考えて「若葉でもって」と解する説があり、前者に立てば、「若葉があざやかに萌えている」という自然描写となり、ここで一句が切れることになる。後者では「若葉でもって尊像の御目の涙を拭って差し上げたいものだ」という意味になる。そしてどうやら後者の説が有力なようである。私もこの説に従って「して」を手段の助詞と考えたいと思う。そうすれば次は「若葉して」と「青葉して」のどちらがよいかという問題になるが、御目の涙をぬぐうには、矢張り柔らかい若葉の方がよいのではないだろうか。「若葉」は芭蕉の書いた「笈の小文」に出てくる形であり、「青葉」は支考編の「笈日記」に出て来る形である。従って『ホトトギス新歳時記』では次の改訂の時にこの句に「青葉」の例句を外して「若葉」の項に入れることにする。

旬日記 汀子

平成十八年一月二日 悼 三井紀四様

笠寺 や 長 寿 惜 み て 年 迎 ふ

一月七日 芦屋ホトギス会

悴みて受けし訃報のあまたたび

寒牡丹色を明かして久しかり

松の内 仕事の山を崩せずに

一月八日 関西野分会

柀を挿しても今の暮らしぶり

暖房がほしてもしまふ花束よ

雪深き地より来られしことを先づ

一月八日 下萌句会

上木の句集 配られ初句会

どの花も 祝の心に初句会

生涯を語る句集や冬 薔薇

一月九日 ロイヤル俳壇

宵戎とて持ち直す日和かな

松の内らしきロビーの行き来かな

失せ物のあらぬ方より松の内

雪抜けて来しとは見えぬ装ひに

一月十日 大阪倶楽部

風花の舞ふといふ空知つてをり

予定組む予報は寒の雨と聞き

嶺越えて風花となるところかな

御堂筋まで 気配あり初戎

万両に啄み余す色見ゆる

風花のやうで流れてゆく時間

賑はひの先の先まで初戎

一月十日 綿業倶楽部

避寒とは 家居心と通ひけり
うばはれし自由といふは雪のこと
目的地 十日 戎と重なりぬ

一月十二日 清交社

又会うて年賀交してをりにけり

体調をととのふことも初湯かな

乗初めの車の話題 広がりにぬ

掃初は書齋片付け終へしより

初旅の上京すでに二度目かな

初夢のなき健康を取り戻す

一月十三日 工業倶楽部

乗初といふも 駅まで子を送る

悴みて聞き逃したることのあり

爪の色まで 悴んでをりにけり

わが愛車 心新たに 乗初す

松風の一揺れしたる 初明り

一月十三日 悼 大津立子様

悴みて 御恩返し の出来ぬまま

一月十七日 有恒倶楽部

器用な手とは 悴みてあるときも

饒舌も 無口も なくて 悼みて

雪霏々と 今別のこと 考へず

悴む手 握り 心の通ひけり

星を見る 会の雪見と 記憶して

上木の句集 華やぐ 初句会

室咲やたちまち 客間 出来上がる

一月十七日 無名会

やゝぬるき初湯が 好みなりしこと

初湯とて 正座 五分を 続けけり

しまひ湯でありし 初湯でありにけり

風花に 松の高さの 消えにけり
風花の 先の先まで 日を抱く

一月十八日 夏潮句会

宝船縁 起か つぎて みることに

水の沙汰 聞けば 聞くほど 怖しく

雪の沙汰 聞けば 聞くほど 怖しく

お隣へ 抜け 道出来て 春隣

焚火より 引き上ぐる 人残る 人

枯菊の 炎の 景気よ かりけり

一月二十一日 偲ぶ会 箱根

旅心 雪の 東京 発ちて 来し

先づ 雪を 愛づる 心となる 旅路

一月二十二日 偲ぶ会 二日目

霧氷見し 人も 寝過ごす 人も 旅

もう 春の 旅の 案内 配らるる

一月二十六日 きざらぎ会

会場に 目立つ 一人の 春著かな

初旅といひて 仕事の 一部とも

初富士の 所在うすうすしかと あり

華やきに 困まれしより 初句会

日帰りの 日脚 伸びしと 富士を見る

一月二十七日 時雨句会

景として 見し 雪踏んで をりにけり

東京の 雪の なき 朝つなぐ 旅

雪の 朝雪の なき 朝つなぐ 旅

すぐ 消ゆる 雪を 惜しめる 地に 住みて

読み上げて 目で 追うて みる 歌がる た

旅立の 雪は みそぎ でありに けり

一月二十九日 野分会

来られる や来られぬ や 旅雪 押して

雪は 見る ものである 間の 過ぎ 易く

廣太郎句帳

廣太郎

平成十八年一月五日 蕉心会

初句会猫に待たれてをりにけり
春着着て酒とめどなく酌む女
御慶のぶごと猫の声昂れり
冬の日を捉へ地球は公転す
波立ちて大川端といふ寒さ
川うねる嵩に小寒纏ひたる
初雁といふ侘び助に偲ぶ人
一月十一日 一水会
風花や 六甲 嵐に 導かれ
タイガースグッツと決めて買初に
俳磚を眺めつ日向ぼこりかな
一月十二日 十筆会
里山といふ居心地に年酒酌む
軒氷柱燕返し の構へかな
一月十七日 草木瓜会
春を待つ日差に角度ありにけり

寒牡丹大輪といふ主張かな
鳩鴉雀春待つ寺苑かな
春を待つ心は君の唇に
天泣といふ待春の空であり
一月十九日 登高会
雪女郎ふり向けばミヤコ蝶々
葉牡丹に触るゝ短針花時計
口赫く赤く雪女の消ゆる
ホトトギス同人で杜氏寒造
菰脱いでより葉牡丹の色となる
一月二十一日 高濱年尾偲ぶ会
旅心都心の雪を発ちてより
その中の雪女めく佳人かな
白といふ彩り重ね山眠る
去年は祝ぎ今年は偲ぶ心より
雪といふ吟行日和ありにけり
一月二十二、二十三日 年寿会
水仙の威に風神の鎮もれる
水仙を岡本眸抱いたんか
灯台と山と貴方のコート白
一月二十九日 虚子記念文学館投句
春を待つ丸き地球の天辺に
さりげなく深く臘梅香りけり

五句といふ冷たき数でありにけり
三寒に星見て四温海を見る
昨夜君の唇赤し星凍てし
臘梅に会ふも下田の縁かな
臘梅の香を包みゆく風の冷え
一月二十三日 朝日カルチャー若草句会
春を待つ水平線の先の先
小正月少し派手目に紅を引く
マストてふ春を待ちたる高さかな
一月二十四日 若水会
碧梧桐忌の過ぎたれば君との夜
凍蝶に極楽浄土ありやなし
震へ咲く寒桜てふ運命かな
凍蝶に神の恵みの日の少し
一月二十五日 目黒学園句会
白銀も春待つ色として箱根
待春の色に落ち着く庭の木々
待春の車窓は富士を尖らせて
厄払して消息を断ちし人

雑詠

廣太郎 選

鳳仙花咲かせ待たるる冬扇忌 東京 川口利夫
 朝顔の宙にうきたる淡き色 同
 夕暮を惜むごとくに秋の蟬 同
 思ひきり爽秋の軸掲げたり たつの 浅井青陽子
 俳徒われつゝく残暑に逆らはず 同
 いろいろの虫の音色のわが山居 同 榎原 稲岡 長
 幽かにも莢のむらさき豇豆熟れ 同
 二た三言音遅れぬし遠花火 同
 蝸の高音に夕日呼び落す同 同
 我にして我ならぬ我サングラス 神戸 長山あや
 芋殻てふあの世のものゝ軽さかな 同
 マーラーのタイタン歩み去る銀河 同
 さくらんぼ狩や山寺には寄らず 長岡 安原 葉
 懐古あり世を憂ふあり明易き 同
 朝市へ行つて来る間に沙羅咲けり 同
 硯洗ふ文芸の血を母に享け 神戸 山田弘子
 かなかなの月に鳴き澄む宿りかな 同
 かなかなや森は夜明へ移り初む 同

仲秋の虚子句碑訪はんとぞ思ふ 福岡 松尾緑富
 虚子の句碑桜紅葉の散るなへに 同
 法師蟬秋月城址暮れなんと 同
 一畳の天地吹き抜け秋の風 姫路 桑田青虎
 いわし雲行けざる旅の案内かな 同
 トルファンの旅の懐古のいわし雲 同
 かほほりの飛んで夕方膨らみぬ 神戸 後藤立夫
 滴りの時間見詰めるやうに落つ 同
 穀象のぞろぞろ証拠でるごとく 同
 この年も西瓜苦手と言へぬまま 徳島 真鍋万緑
 くノ一の日焼してゐる忍者村 同
 こんなものまで冷やされし夏料理 同
 千代女の句千代女らしくて露の軸 東京 坊城俊樹
 双蝶のもつれあひつつ萩の墓 同
 露の碑の千代女に墓のなしといふ 同
 初嵐川風にふと海匂ふ 大阪 塙 告冬
 星流れ空に向うのありにけり 同
 秋の蝶席を探して漂へり 同
 滴りのとくとくと落ちつとと落つ 福山 竹下陶子
 落し文あり虚子俳話かも知れず 同
 亡き君に百四歳の生身魂 同
 踊の輪囲む人の輪出店の輪 河内長野 吉年虹二
 蓮の実の飛び仏恩の輪廻とす 同
 昼はピザ夜は焼肉帰省子と 同

雑詠句評（十二月号より）

基子・暮潮・雅

純也・一步・比奈夫

小木菟・仁義・昭代

弘子・廣太郎

白き歯の見える勝利の日焼顔 神戸 涌羅由美

健康そのものが漲っている句。よく日焼した顔に白い歯。その上に勝利とある。歓喜の笑顔が加わって句がはじけてしまいそうにさえ思える。おのずから今夏の甲子園野球大会でのシーンが浮かび上ってきて共に又喜んでしまふ。

そして、「日焼」とは人生そのものに於いてプラス思考の方に考えられるのではないか。その陰には努力と研鑽の並々ならぬものも有るであろうし、などなど、と、此の句の持つ大きさに感動する。誠に健康的明朗なすばらしい証しを詠み上げて下さったもの

と、此の句の登場に喝采を送りたく思った。（基子）

スポーツの試合で勝利を得た若者の澀刺とした笑顔が清々しく見えてくる句である。恐らく屋外でするスポーツであろう。練習の時から長時間外でしつかりと日焼をして、その努力が報われたのである。「白き歯」との対比から、誠に健康的な明るい句として纏め上げている。（廣太郎）

風もまた遺品の一つ古扇 神戸 山田弘子

簡単に言えば、親しかった故人の遺品の扇で自分の顔をあおいでいる、風を送っているということだろうが、それでは味も素っ気もない。あり余る故人への思いを伝えたい作者の気持ちがこういった表現をとらせたのであろう。この作者独特の言い回しがころにくいほどである。「風もまた遺品の一つ」はうますぎるほどうまい表現だが、それによって作者のしてやったりという顔が見えてくるのではなしに、心の丈が見えてくるものになっている。さすがだと思う。（暮潮）

亡くなった方が残された「古扇」、さぞその方は大切にされていたのであろう。扇ぐとその人の生前使っていた時の香りも漂ってきたのであろう。その運び来る「風」に、その方を偲んでいる作者なのである。その風までも「遺品」と見る作者の感性に脱帽である。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

千子選

揚花火平和な時代生きてゐる 秋田 浅利恵子
 遠花火なりに特等席のあり 同
 雲払ひつつ渡るらん月今宵 樞原 稲岡 長
 月を見る月に見られてをりしかな 同
 秋天に階ある如し昇りなん 豊中 瀧 青佳
 梅雨の間を惜しむ命の舞ひ始む 同
 吊橋を見上げて鮎の屋形船 たつの 浅井青陽子
 残暑なほつゞく日々なり書にも倦み 同
 初秋の光より生れものの影 神戸 長山あや
 吾もいつか風のこころとなる野分 同
 カルチェが欲しいといふ人時計草 同 後藤比奈夫
 晒すべき書ばかりならず晒しあり 同
 虚子館に今年も集ふ盆の句座 吹田 宮崎 正
 深熊野の神域の径秋涼し 同
 露の世の縁とあれば大切に 東大阪 東野太美子
 秋天を仰ぎては旅恋うてをり 同
 秋急に人声急に森の径 千葉 増田善昭
 気がつけば真只中の秋に在り 同

台風のだこかにありて山の風 東京 今井千鶴子
 鈴虫の道すがらなる情あり 同
 流灯の確と潮路に乗り沖へ 熱海 嶋田一步
 流灯は潮路人には家路あり 同
 流灯会帰路の無口でありにけり 同 嶋田摩耶子
 ソプラノの昇りつめたる声涼し 同
 虚子の世を偲ぶ御寺の萩の花 長岡 安原 葉
 新涼の風拾ひつつ旅にあり 同
 八月や雲は力を抜き初めし 神戸 山田弘子
 秋蟬の声も映つてをりし川 同
 病床へ句を作れよと落し文 姫路 桑田青虎
 さ紅葉の隠れなかりし病窓に 同
 仲秋やしのぶよすがの秋月に 福岡 松尾緑富
 朝蟬のこゝを先途と鳴きつのもり 同
 君待てりアイスクリーム食べながら 東京 稲畑廣太郎
 あのワイン確か冷蔵庫の中に 同
 ぼこぼこ木魚叩いて秋暑し 同 坊城俊樹
 踊りてもくくなほ恋しらず 同

天地有情句評

汀子

釣った鮎の料理を食べながら涼む屋形船。潜る時に一斉に見上げている吊橋への興味が想像される。

吾もいつか風のころとなる野分 神戸 長山あや

野を吹き分ける野分の中に自分の心を置く作者。まるで自分も風になったかのように。

カルチエが欲しといふ人時計草 神戸 後藤比奈夫

有名ブランドのカルチエの時計が欲しいという人のことを思い出しながら見ている時計草。

深熊野の神域の径秋涼し 吹田 宮崎 正

世界遺産として登録された深熊野の神社への径の高い杉木立。まことに新涼を感じる心地よさ。

露の世の縁とあれば大切に 東大阪 東野太美子

この世はまことはかないが、それ故に縁は大切に行きたいとしみじみ思う作者。季節が生きている。

秋急に人声急に森の径 千葉 増田善昭

深い森に踏み込んだ途端にひんやりとした秋を感じた作者。そこに人声がした驚き。

揚花火と平和な時代生きてゐる 秋田 浅利恵子

揚花火と平和。作者の心の中には何かこの平和を守って行きたい願望が芽生えた。

雲払ひつつ渡るらん月今宵 榎原 稲岡 長

十五夜の月を雲間に見つけた喜び。夜を徹して渡る月の入りまで心を置いた作者。

秋天に階ある如し昇りなん 豊中 瀧 青佳

この秋の澄んだ高い空へまるで階段が誘っていくように何一つ障害物がないことに気がついた作者の感性。

吊橋を見上げて鮎の屋形船 たつの 浅井青陽子